

日本学術会議
科学者委員会 学術誌問題検討分科会（第11回）
議事要旨

1. 日時 平成26年1月27日（火）16:00～18:00

2. 会場 日本学術会議 5-C（1）会議室

3. 出席者 : 浅島委員長、北里副委員長、植田幹事、嶋田委員、松岡委員、吉田委員、玉尾委員、古田委員、谷藤委員、永井委員、林委員 11名

欠席者 : 田口幹事、小松委員、辻村委員、矢野委員、須田委員、長野委員、北村委員 7名

オブザーバー：一橋大学附属図書館長 江夏氏

事務局 : 盛田参事官、太田参事官付、辻上席学術調査員ほか

4. 配布資料

資料1 前回議事要旨（案）

資料2 セミナー「学術出版を学ぶ」 アンケート結果（永井委員）

資料3 シンポジウム進捗状況（永井委員）及びシンポジウム企画書

資料4 シンポジウムポスター案

参考1 委員名簿

追加資料 新しい局面を迎えたオープンアクセスと日本のオープンアクセス義務化に向けて（林委員）

5. 議事

1) 前回議事要旨（案）の確認

資料1によって前回議事要旨の確認を行い、了承された。

2) 最近のOA化の動きについて

【OA化の動きに関する自由報告】

各委員より、OA化の動きに関して適宜報告が行われた。

- ・浅島委員長：最近の各大学では、ジャーナルを購入できなくなっている。大学図書館コンソーシアム連合(JUSTICE)によって交渉力は高まったが、円安によって財務状況は深刻である。図書館にとっては、ジャーナルの購入価格と、投稿料が大きな問題だ。OAの広がりによって大学がどうやって費用を考えるか、この点についての十分な議論がない。ここ数ヶ月（2か月程度）でも、動きがある。それらへの対応は難しい。著者負担か、大学購入かについては大学運営そのものに関係するようになった。こうした点を、政策提言にまでまとめる必要がある。日本全体の学術のあり方が変わってきているという認識である。
- ・谷藤委員：Peter Suber氏に会った。アメリカのOA化の議論は、OA化ありきで、ずれがないようである。OA化とイノベーションが組み合わさっている。
- ・永井委員：Blackwell社等のブースでも、アメリカはOA化で行くだろうと言われている。ACSの動きがショックだったようだ。
- ・植田幹事：ジャーナルをOA化してもそれだけではIFは高まらず、シンポジウムと組み合わせるという方法が採られているようである。シンポジウムとジャーナルプロモーションでIFが高まるという仕組みである。ただ、プロモーションのしすぎで切られるジャーナルもある。また、PLoS ONEのよ

うに、中身のレビューをせずIFで4となるジャーナルも出てきた。PLoS ONEは、物理学、医学、生物学など多様な分野が対象となり、本来は論文の評価基準がことなる。そのためにガイドラインが必要だろう。

- ・江夏先生：OAに関しては、英語・数学を用いる分野と、それ以外では差が大きい。英語・数学を使わないところでは、OAに関する問題意識はあまりなく、OAとはなんぞやということから始めないとならない

【国内ジャーナル出版者の状況】

永井委員から、資料2にしたがって、説明があった。

- ・資料2は、アンケートの結果である。ジャーナル出版者の生の声である。いろいろなジャーナルの状況を知る材料となる。

(議論)

- ・ある国立大学では、投稿論文については、全て大学で事前チェックを行い、剽窃等がないかチェックするようになってきている。最近では、剽窃があったときに、著者の所属に連絡が行くようになってきている。文部科学省の指針では、90日以内に組織が対応しないとしないことになっている。
- ・東邦大学では、剽窃の問題があったが、これへの対応策が適切だったという評価が得られている。
- ・最近では、フォトショップの改ざんもわかるようになってきている。怪しい論文の多くは事前に引っかかるが、すり抜けてパブリッシュされるものもある。

3) シンポジウムの開催について

【シンポジウム開催の意義】

浅島委員長から2014年3月13日(木)のシンポジウムについて、その開催の意義等について説明が行われた。主な点は次の通り。

- ・学協会にとっても、OA化は深刻な問題である。若手の学協会離れ、具体的には、人との交わりを避け、一方では研究成果の意欲が高いという傾向がみられるようになってきた。このバランスをどうするか問題だ。OA化した後、どういったストラテジーの中で学協会が対応するか、その仕組みを考える必要があるだろう。
- ・研究者間格差という問題もある。日本はお金のある研究者は、OA化のコストを払えるが、すべての研究者にとってそれが容易であるわけではない。
- ・今回のシンポジウムは、OA化の進行、それに関連した諸問題、その他関係者がどう考えているかといった現状を、多くの人に広くわかってもらうきっかけとしたい。
- ・3月13日のシンポジウムは、大きな意味がある。どういった出し方をするか検討する必要がある。

【シンポジウムにおけるOAに対する姿勢】

シンポジウムにおいて、分科会としてOAに対する姿勢はどうあるべきか、議論が行われた。主な意見は次の通り。

- ・統一した見解は出せない。
- ・各人は見識を持って発表する。
- ・現状を広く伝え、今後を考えてもらうことが狙い。
- ・結論ありきのシンポジウムではなく、これを埋めて後で検討してもらう。問題提起。

【シンポジウムの詳細について】

永井委員から資料3、4の説明が行われた。主な点が次の通り。

- ・資料3は、準備状況報告と当日の次第案である。
- ・資料4(ポスター案)について、今週中にコメントをもらいたい。特に氏名、肩書など。(→日付

の後の線を細くする。メインタイトルを小さく、サブタイトルを大きく。「司会」の文字を前に出す。地図を下にする)

- ・資料4は、A4版も作成する。
- ・資料4（ポスター）の送付先としては、学協会、図書館、大学等を想定している。
- ・できるだけ多くの人に来てもらいたいので、申込み状況に応じて、追加的広報活動を行う。そのため、事務局は、2月中旬、2月下旬と、適宜、申し込み状況を浅島委員長等へ連絡する事となった。

永井委員の説明を踏まえて、以下の確認・ディスカッションが行われた。

大西会長の挨拶・講演について

- ・大西会長の演題は「日本学術会議からの問題提起」か。
- ・講演ではなく挨拶か。（→事務局確認）

パネルディスカッションについて

- ・順番は、林委員、下間氏、植田委員、江夏氏、永井委員、玉尾委員、谷藤委員
- ・文部科学省研究振興局下間康行氏にも、願います。
- ・1人当たり、5分の説明と、1つの質問を受ける。
- ・席は第一列（前列）に並び、壇上には司会のみとする。

マスコミ対応について

- ・内閣府、文部科学省の記者クラブに投げ込みをする。

控室対応について

- ・控室を用意し、お茶とコーヒーを準備する。

『学術の動向』について

- ・『学術の動向』10月号特集1として、このシンポジウムで登録してある。締め切りは7月20日で、10人で5万字。
- ・挨拶や講演の方の原稿も集められるようにしたい。
- ・関連して速記が入れないか、検討する。

その他

- ・当日、初歩的なOAについてのペーパーを作成し、配布してはどうか。
- ・関係者席は、前の方の一行確保する。
- ・当日は、話している人の名前と肩書きがわかるように、スクリーンに同時に表示されると良い。
- ・シンポジウムの直前、2014年3月13日（木）12:00－12:30に分科会を開き、最後の打ち合わせをする。
お弁当（1000円でお茶付）が必要な人は申し出る。

4) その他

次回は、2014年3月13日（木）12:00－12:30に、シンポジウムの直前に行うこととした。